

# 世界遺産エルデニゾー寺院（モンゴル国） で再発見された漢モ対訳 『勅賜興元閣碑』断片

松 川 節

はじめに

モンゴル帝国の首都カラコルムの地に16世紀に建立されたエルデニゾー寺院は、モンゴル国に現存する最古の仏教寺院であり、2004年にユネスコの世界文化遺産にも登録された。この寺院の過去・現在・未来を総合的に調査研究する日本・モンゴル共同「エルデニゾー・プロジェクト」が日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A：「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究——過去の復元から未来への保存へ——」代表：松川節）を得て2009年度より3年計画で進められており、2009年9月、現地における準備調査によって新たな文字資料が出土し、それが1347年にカラコルムで建碑された漢文・モンゴル文による『勅賜興元閣碑』の一断片であることが確認された。本稿は、この新資料の発現経緯を辿りつつ、モンゴル文面の訳註を試みるものである。

## 1. 『勅賜興元閣碑』の再構

1347年、大元皇帝トゴテムルの勅命を受け、許有壬<sup>1)</sup>の撰文によってカラコルムに建てられた漢文・モンゴル文対訳『勅賜興元閣碑』は、五層90mという壮麗な仏塔を伴う興元閣という仏閣が、太宗オゴデイの時代（在位：1229～41）に先ず基台が築かれ、憲宗モンケの時代（在位：1251～59）に

## 2 (松川)

竣工し、仁宗アユルバリワダが登位した至大4 (1311) 年に修築され、さらに31年経過した順帝トゴンテムルの至正2 (1342) 年から6 (1346) 年まで、4年かけて重修された経緯を記したものである。この碑は、19世紀末にその断片が初めて発見されて以来、当時まだはっきりしていなかったカラコルムの位置決定のための根本史料として利用された<sup>2)</sup>だけでなく、21世紀に入ってから<sup>3)</sup>の考古学的発掘調査によって、オゴデイの万安宮があった場所に興元閣が建てられたという新説が出され<sup>3)</sup>、また、万安宮付近に現存する巨大な亀趺に載っていたのは、他でもないこの『勅賜興元閣碑』であること<sup>4)</sup>が明らかになり、カラコルムの歴史を解明するための重要な史料として注目を集めつつづけている。

『勅賜興元閣碑』の漢文テキストは、許有壬による『至正集』、『圭塘小稿』によって伝えられているが、碑石そのものは、16世紀末、現地にエルデニゾー僧院が建立されるさいに分断され、堂宇の礎石や欄干用の石材として再利用された。そのため、いくつかの断片のかたちでしか伝存していない。19世紀末のラドロフ W. Radloff 探検隊によって2碑片 (Radloff XLI-1, XLI-2/-3)、1926年のポッペ H. H. Ponne の調査によって、さらに2碑片 (Peppe 1, 2) が見つかった<sup>5)</sup>。

1952年、アメリカのモンゴル学者クリーヴス F. W. Cleaves は、こうした経緯によって得られた『勅賜興元閣碑』モンゴル文面の4つの断片を、ラドロフが発見していた1つの断片の漢文面 (すなわち上述の Radloff XLI-3) 及び編纂史料 (『至正集』所収の『勅賜興元閣碑』) と対照しつつ包括的に研究した [Cleaves 1952]。クリーヴスは、先ずこの碑文の発見の経緯と研究史を述べ、『至正集』所収の漢文テキスト『勅賜興元閣碑』に訳註を付し、その上で、断片的なモンゴル文面テキストの転写と訳註を試み、全体の3分の1に及ぶモンゴル文テキストの欠損部分については、漢文テキストに基づいて、部分的にテキスト再構築をも試みた。

1984年、中国社会科学院民族研究所のドブ Dobu はその著『回鶻式蒙古文文献彙編』(モンゴル文)において、『勅賜興元閣碑』モンゴル文面の知られ

ている4つの断片の再構図を初めて提示した [Dobu 1984, p. 320]。

2003年8月、ドイツ・モンゴル共同「カラコルム宮殿」プロジェクト隊によって新たな1断片が発見され、2005年6月にボンで開催された「チンギスハンとその継承者たち」展で公開された。筆者は、同展の図録 [Catalog] に掲載された拓影と解説文に基づき、この新発見の断片を紹介しつつ、解説を試みた [松川 2006]。

その後、この2003年発見断片の解説や出土状況についての研究がモンゴル国の研究者によって公表され、さらに、別の新たな一断片についての研究が白石典之・ツヴェンドルジによって公表されたため、筆者はそれらを踏まえた上で、『勅賜興元閣碑』漢文面及びモンゴル文面の再構案を提出し [松川 2008a]、また『勅賜興元閣碑』モンゴル文テキストの日本語訳註を試みた [松川 2008b]。こうして、2008年の時点で『勅賜興元閣碑』の6つの断片<sup>6)</sup> が知られていたのである。

## 2. コトヴィチ発見の3断片

これらとは別に、ポーランドのモンゴル学者コトヴィチ В. Котвич は1912年に現地を訪問し、ラドロフが発表した2断片に接合すると見られる3断片を新たに発見し、1918年に報告した [Котвич 1917]。

コトヴィチの報告によると、新たに発見された3断片は、エルデニゾー寺院の西壁の門から南側に下がった最初と2番目の仏塔の基石にはめ込まれており、僧侶の反対によって取りはずすことができず、そのままの状態で採拓することを余儀なくされ、反対側の漢文面は検分できなかった。これらのモンゴル語の3断片は、碑文全体から見ると、ラドロフの発表した2断片が下方を占めているのに対し、2片が中央部、1片は右上部を占めており、いずれも碑文の冒頭と末尾を含んでいないので立石年は明らかでないが、六十干支による年号表示や、チンギス、オゴデイ、モンケの名前が刻まれているという [Котвич 1917, pp. 206–207<sup>7)</sup>]。

コトヴィチは、結局この3断片の釈読は公表せず、ラドロフの2断片のう

#### 4 (松川)

ちの1断片 [Radloff 1892, XLI-I] を再度採拓し、移録・釈読するにとどまった [Котвич 1917, pp. 209–214]。一方、コトヴィチが新たに発見したとする3断片の所在については、その後いかなる報告も無く、現在に至るまで「再発見」されてこなかった。

### 3. コトヴィチ断片の再発見

2009年9月7日～10日、日本・モンゴル共同「エルデニゾー・プロジェクト」調査隊はエルデニゾー寺院において準備調査を行い、コトヴィチの記述するエルデニゾー寺院西壁の門から南に下がった1つめの仏塔の基石部分を清掃したところ、ウイグル式モンゴル文字モンゴル語の碑文1断片が発見された。碑石はモンゴル文面を表にして埋め込まれており、我々はその場でモンゴル文面の湿拓を採った。この時点では深く埋め込まれている反対面を見る手段はなかった。9月10日に調査隊はウランバートルに帰還し、翌9月11日、モンツァメ通信社にて記者発表会を開催し、この貴重な新発見を何よりもまずモンゴル国の人々に報告した。報告内容は、モンゴル国営テレビ並びにモンゴル国の主要新聞『ウネン』紙・『ゾーニイ=メデー』紙にて報道された<sup>8)</sup>。

同年9月下旬、碑石を仏塔から取りはずす作業がエルデニゾー博物館によって行われ、取りはずされた碑石は博物館収蔵庫に保管された。この結果、モンゴル文面の対面に漢文銘文があることが判明し、モンゴル側共同研究者の A. オチル A. Очир (国際遊牧文化研究所研究員) が漢文面の湿拓を採り、同年10月12日に来日してこれを日本に将来した。10月16日、プロジェクト調査隊は大谷大学において記者説明会を開催し、その内容はNHKテレビ、共同通信、そして主要紙によって報道された<sup>9)</sup>。

2010年1月29日～30日、筆者は再びエルデニゾー寺院に赴き、モンゴル側共同研究者の Yo. ナイガル Ё. Найгал エルデニゾー博物館館長の立会いの下、この碑石のモンゴル文面と漢文面の湿拓を採った。以下の釈読は、以上の調査による拓本に基づいたものである。

再発見された断片は縦 40 センチ、横 30 センチ、厚さ 40 センチで、漢文面は計 7 行 38 文字が見られる。漢文面は許有壬の『至正集』所収テキストによって全文が知られているため、すでに発見されたラドロフ断片、2003 年発見断片、1984 年発見断片によって碑面の再構が可能であり、筆者はこれをすでに提案している [松川 2008a]。漢文テキストの解読により、今回再発見された断片は 1984 年発見断片のすぐ上に位置し、碑文全体のほぼ真ん中にくることが判明した。このことより、対面のモンゴル文面においても、碑文全体のほぼ真ん中に位置することが予想される。モンゴル文面は全 13 行で、内容を検討した結果、碑文全体の 13 行目～25 行目に当たり、Poppe 2 のすぐ右に接合し、Radloff 3 の少し上に位置することが判明した。結果として、筆者が提案したモンゴル文面の再構図 [松川 2008a] は修正を要することとなった。新たな再構図を図 4 に示す。

#### 4. テキスト

##### 漢文面

漢文面 (図 1) の計 38 字は再構された碑面テキスト (図 2) の 11～18 行目を占めており、12 行目を除くと、文字の異同はない。12 行目の「□書右丞相別□□□花」については検討を要する。『元史』巻 113、「宰相年表」2 によると、この人物は、中書右丞相別兒怯不花 Berkebuq-a ということになるが、注目すべきは、この 10 文字は碑面には刻まれているものの、編纂史料の『至正集』・『圭塘小稿』には含まれていないことである。このことは、何よりもまず、生の石刻史料が編纂史料の欠を補うことを立証している。そして、この史料においてみれば、『至正集』で：

丙戌十一月七日□□上御明仁殿中書省臣奏閣修惟新不可不銘勅翰林學士承旨臣有壬文諸石

と書かれているのが石刻では：

丙戌十一月七日／上御明仁殿中書省臣奏閣修惟新不可不銘□勅□中書右丞相別兒怯不花□□□翰林學士承□旨臣有壬文諸石



图 1

と刻まれている(□は空格を示す)ことから、興元閣碑を著せという勅命は、中書右丞相ベルケブカを介して、翰林學士承旨の許有壬に下命されたことがわかり、それは、『元史』「宰相年表」に従えば、ベルケブカが中書右丞相にあった年代、すなわち丙戌(1346)年ではなく、その翌年の丁亥(1347)年であったことが判明するのである。『至正集』・『圭塘小稿』所収の『勅賜興元閣碑』漢文テキストは撰文の完成年及び立石年についての記述を含んでいないため、今まで『勅賜興元閣碑』の成立年は、中書省の臣が上奏した「丙戌」(1346)年と見なされてきたが、石刻原物の発現と、そこに編纂史料には含まれない記述があったことにより、その成立年は、早くともトゴンテムルが勅命を発した1347年であることが明らかになった。

### モンゴル文面

モンゴル文面(図2)の計13行について、翻字(TRANSLITERATION)および転写(Transcription)と逐語訳を提示する。転写はリゲテイ式を用いる。転写においては、モンゴル文面全体中の通し行数をも記入した。

#### Texts

#### TRANSLITERATION

- [1] N
- [2] YWYYL TWYM'N "NKKY 'D-Y T'L'DČW
- [3] ' X'RYZ-Y TWRWXS Y TWRWYD'XWLWN 'WYČ'KW
- [4] 'Č' 'WLWS P'YYXWL'N 'YR'ČW 'WL'N "MYD'N
- [5] 'Č' TWRWXS Y ČYL'XW 'WYMK'RYKWLWKS'N-TWR "D'LY
- [6] WS P'YYXWLXW TWYP 'WČ'XWR-Y T'ND' 'WRWSY XWLWXS'N
- [7] N S'TKYL-TWR 'YNW "D'LY NYKWL'SKWY PWYKW-YY M'D'ČW PWY//
- [8] //P'SW PWSWT-Y K'R TWNYLX'XWLWN ČYD'XW K'M'

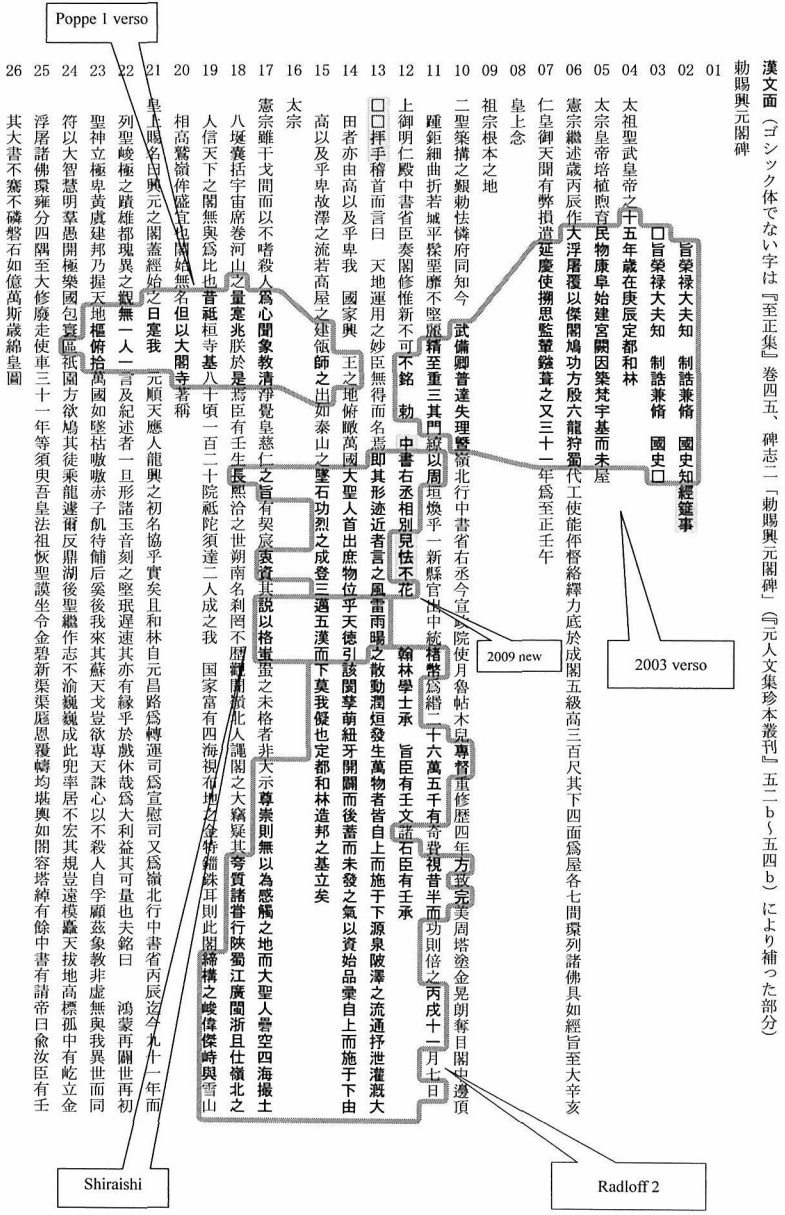


図2





图3

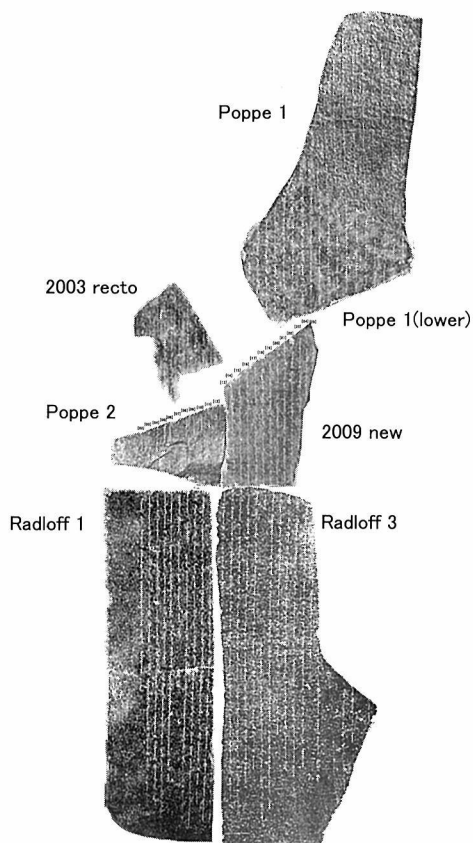


図 4

N "S//

[9] //’ SWYM-’-YY TWYRW N PWSX’XWY-TWR PWRM’T-  
NWXWD

[10] Y "SWRW M’XD’N S’YYSY’XS’N-Y PY S’X’R’N PWYLWK’

[11] XYNK ’WNK K’W SWYM-’-YYN K’R

[12] WN "YMW N Y’K’ "XW//

[13] TWR "D’LY T’//

## Transcription

- [1/13] N
- [2/14] jüil tümen anggi ed-i deledčü  
種 万 類 の 物 を 叩き
- [3/15] // qarıs-i doroyısi doroitayulun üjekü .  
異邦を 下に 屈服させて 見る
- [4/16] -'Ĉ' ulus bayıyulan irejü olan amitan  
より 国を 建てて 来て 衆 生を
- [5/17] -ača doruyısi čılayu ümkerigülügsen-tür adalı  
より 下に 石を ころがしたのに 同じく
- [6/18] [ul]us bayıyulqu töb ujayur-i tende orosıyuluysan  
国を 建てる 根 本を そこに 定めた
- [7/19] N setkil-tür inu adalı nigülesküi bükü-yi  
心に (←その) 同じく 慈悲深くあることを  
medejü bür[ün]  
知った 結果
- [8/20] //basu busud-i ker tonılayulun čıdaqı kemen "S//  
～なら 他人をいかに 解脱させ 得るかと言って
- [9/21] [en]e süm-e-yi türün bosqaqui-tur burmad-nuyud  
この 寺 を 最初に 建てるときに ? 【複数形】
- [10/22] //Y asuru maytan sayısıyaysan-i bi sayaran bülüge  
非常に 誉め 讃えたのを私は 疑って いた
- [11/23] qing öng geü süm-e-yin ger  
興 元 閣 寺 の 閣
- [12/24] WN ayımün yeke ayu[i]  
このような大きく 巨大な
- [13/25] tur adalı te[re]  
に 同じくその

## 語註

[2/14] **jüil tümen anggi ed-i deledcü** 「…種万類の物を叩き」

jüil と ed の読みについては、ラドロフ断片 Radloff 3 [15] tümen jüil ed-i törögüljü manduγulumu. 「万種の物を生み出し発展させる。」との対比から、問題ない。本テキストは漢文原文の「風雷雨暘之散動潤烜發生萬物者」のうち、「發生萬物」の訳に当たる。jüil の前は欠けているが、mingyan 「千」が来て「千種万類」という句をつくる可能性がある。

[3/15] **qaris** 「異邦」

qari の複数形。ポッペ断片 Poppe 1 [34] qaris-un qad 「異邦の王たち」に既出。qari の原義は「異なった、奇妙な」という形容詞であり、名詞としても「異邦」の意で使われる。『モンゴル秘史』<sup>10)</sup> の qari の傍訳は「邦」(03:43:03, 11:30:03), 「外邦」(07:48:03, 08:18:04), 「部落」(09:08:09, 09:22:02)。『華夷訳語』(甲種本)<sup>11)</sup> の qaris の傍訳は「王子毎」(2:24b1)。

[3/15] **doroitayulun** 「屈服させて」

doroitayul- は『モンゴル秘史』では doroyita'ul- 「教屈下」(11:44:10, 11:45:04) すなわち「屈服させて」の意。qaris-i doroyisi doroitayulun üjekü は漢文原文の「俯瞰萬國」の訳に当たる。

[5/17] **-ača doruyisi čilayu ümkerigülügsen-tür adali** 「…より下に石をころがしたのに同じく」

上方に位置するポッペ断片 Poppe 1 lower [1/17] kemekü に繋がる。漢文原文が「如泰山之墜石」であることより、*taišan* kemekü *aγula*-ača doruyisi čilayu ümkerigülügsen-tür adali 「泰山という山より下に石をころがしたのに同じく」と、*taišan* 「泰山」と *aγula* 「山」を補うことができるだろう。

[6/18] **[ul]us bayiγulqu töb uγayur** 「国を建てる根本」

töb uγayur は碑面が磨耗していて読みにくい<sup>8)</sup>、漢文原文「造邦之基」の訳とみる。

[7/19] **setkil-tür inu adali nigülesküi бүkü-yi medejuür bür [ün]** 「その心のよ  
うに慈悲深くあることを知った結果」

上方に位置するポップェ断片 Poppe 1 lower [3/19] : burqan-u šasin nom-un yosun-i と、下方に位置するラドロフ断片 Radloff 3 [7/19] : čegejin dotorayan sedkir-ün nom šasin-i delgeregöljü ülü uqaqun mungqa7-ud-i sayid udumiyar uduy-a より、この行は「仏の教え、(仏)法の理をその心のように慈悲深くあることを知った結果、胸の内に想うに、法と教えを広めさせ、悟らざる愚か者たちをよき導きによって導こう。」という意味になる。漢文原文の「聞象教清淨覺皇慈仁之旨有契宸衷資其説以格蚩蚩之未格者」すなわち、「象教の清淨・覺皇慈仁の旨を聞き、宸衷に契<sup>かな</sup>う有り。其の説に資し、蚩蚩の未だ格せざる者を格するを以て…」に対応する。

[8/20] //basu busud-i ker tonilyayulun čidaqu kemei 「××なら他人をいかに解脱させ得るかと言って…」

上方に位置するポップェ断片 Poppe 1 lower [4/20] : yeke kündülemtegi sedkil-iyer es-e と、下方に位置するラドロフ断片 Radloff 3 [8/20] : süm-e-yi bosqayulqu šiltayan ayin kü bui j-e より、この行は「大いに尊重すべき心によって××しないなら他人をいかに解脱させ得るかと言って、寺を建てさせる理由はこのようであるぞ。」という意味になる。漢文原文の「非大示尊崇則無以為感觸之地」すなわち、「大いに尊崇を示すに非ざれば則ち以て感觸の地と為すこと無し」に対応する。

[9/21] burmad-nuyud 「？」

burmad は在証されない単語。nuyud は名詞を複数形にする語尾であるため、burmad は名詞である。漢文原文には逐語的に対応する語がない。burqad (burqan「仏」の複数形)の誤刻か？

[10/22] sayaran 「疑って」

sayara- は一般的なモンゴル文語としては「弱る、消える、伸びる、減少する」といった意味だが、『モンゴル秘史』sa'ara- の傍訳「疑」(04:11:02, 05:26:05)、「疑惑」(08:42:05)、に鑑みると、「疑う、ためらう」という意味で使われていたことがわかる。

## おわりに

本稿の目的は、新たに発現した『勅賜興元閣碑』の一断片を、一刻も早く学界で共有することにある。そのため、碑文全体における当該断片の位置づけについて、漢文及びモンゴル文の全体の文脈に則して分析するには及ばなかった。今後の課題としたい。なお、コトヴィチの報告する3断片のうち、残る2断片は今もエルデニゾー外壁のストウーパの下に眠っているはずである。エルデニゾー・プロジェクトでは、残る2断片の搜索を2010年5月に現地で行う予定である。また、ポーランド科学アカデミー文書庫のコトヴィチ=コレクションに、エルデニゾー出土碑文の拓本が所蔵されているという情報がある<sup>12)</sup>。本プロジェクトによって、『勅賜興元閣碑』の復原はさらに継続されるであろう。

## 参考文献

- Баяр, Д. 2005: “Эрдэнэ зуугийн цогчин дуганыг малтан судалсан нь.” *Археологийн Судлал* 23: 10, pp. 144–155.
- Becker, E. 2007. *Die altmongolische Hauptstadt Karakorum : Forschungsgeschichte nach historischen Aussagen und archäologischen Quellen*. Berlin. (Internationale Archäologie ; Bd. 39)
- Dobu 1983: *Uyüürjin mongyol üsüg-ün durasqaltu bičig-üd*. Begejng.
- Cleaves, F. W. 1952: “The Sino-Mongolian Inscription of 1346.” *HJAS* 15, pp. 1–123, -12 pls.
- Hüttel, Hans-Georg 2005: “Der Palast des Ögedei Khan—Die Ausgrabungen des Deutschen Archäologischen Instituts im Palastbezirk von Karakorum.” *Katalog*, pp. 140–146.
- Katalog: ⇒ Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH
- Котвич, В. Л. 1917: “Монгольскія надписи въ Эрдени-дзу.” *Сборник Музея Антропологии Этнографии при Російском Академии Наук* 5–1, pp. 205–214.
- Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH (ed.) 2005: *Dschingis Khan und seine Erben. Das Weltreich der Mongolen*. Katalogbuch zur Ausstellung, München.
- 栗林均 2003: 『『華夷訳語』(甲種本) モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター。(東北アジア研究センター叢書 10)

- 栗林均 2009: 『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北大学東北アジア研究センター。(東北アジア研究センター叢書 33)
- 松川節 2006: 「新発見の漢モ対訳『勅賜興元閣碑』碑片」『中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合(科学研究費補助金報告書)』pp. 74-81, 龍谷大学.
- 松川節 2008a: 「『勅賜興元閣碑』の再構」『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する研究(科学研究費補助金報告書)』pp. 201-207, -3 pls., 大阪国際大学.
- 松川節 2008b: 「『勅賜興元閣碑』モンゴル文面訳註」『内陸アジア言語の研究』23, pp. 35-54, +4 pls.
- Мөнхбаяр, Л. 2005: “Эрдэнэ зуугаас шинээр олдсон монгол нангиад бичээсийн уншлага.” *Археологийн Судлал* 23: 11, pp. 158-167.
- Munkhtulga, R. 2005: “Mongolian Text of a Newly-Found Fragment of Karakorum Inscription of 1346.” *Археологийн Судлал* 23: 12, pp. 168-173.
- Поппе, Н. Н. 1929: “Отчет о поездке на Орхон летом 1926 года. (Предварительный отчет лингвистической экспедиции в северную Монголию за год 1926.)” *Материалы комиссии по исследованию монгольской и тангутинской народных республик бурят-монгольской СССР* 4, pp. 1-25, Ленинград.
- Radloff, W. 1892: *Atlas der Alterthümer der Mongolei*. I. St. Petersburg.
- 佐口透 1970: 『モンゴル帝国と西洋』東京。(東西文明の交流 4)
- 白石典之・D. ツェヴェーンドルジ 2007: 「和林興元閣新考」『資料学研究』4, pp. 1-14, 新潟大学.
- Төрбат, Ц. 1997: “Хар хорумын монгол бичээсийн талаар дахин өгүүлэх нь.” *Түүхийн Судлал* 30-11, pp. 90-99, -2 pls.

[本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究——過去の復元から未来への保存へ——」(基盤研究 A / 松川節) による研究成果の一部である。]

## 註

- 1) 許有壬(1287~1364)。字は可用。河北湯陰の人。延祐2(1315)年進士に及第し、以後、仁宗アユルバリワダから順帝トゴンテムルの時代に至るまで50年近くにわたって各種の官を歴任した。大元ウルス後期の名臣と称せられ、『元史』(巻182)に伝がある。その著に『至正集』81巻、『圭塘小稿』13巻、別集2巻、續集1巻、附録1巻がある。
- 2) カラコルムの位置決定の経緯については、佐口1970によってその概要を知ることができる。また、最近公表されたBecker 2007は13世紀から21世紀初頭に至るまでのカラコルムに関わる全ての歴史史料と考古学的発掘報告とを集大成し

たものである。

- 3) Hüttel 2005, p. 145; 白石・ツェヴェーンドルジ 2007, p. 9.
- 4) 白石・ツェヴェーンドルジ 2007, p. 7. なお、このことを最初に示唆したのはコトヴィチであった。See Котвич 1917, p. 207; 本稿の註 7.
- 5) 本稿第 3 節で述べるように、コトヴィチは 1912 年に現地では別の 3 断片を発見したと報告しているが、その後の消息は不明であった。
- 6) 知られている 6 断片の所蔵状況は以下のとおり：

#### 1. Radloff XLI-1:

モンゴル文面のみ。1970 年代まで、ウランバートル市内のボグド＝ハーン宮殿内に放置されていたと言われる。その後、モンゴル科学アカデミー考古研究所に保存された。最近の拓影は Төрбэг 1997, pp. 98–99; 松川 2008b, pls. 5–6. 上下に破断している。松川の拓影は、日本・モンゴル共同ビチェース・プロジェクトによって 1998 年に採拓されたもの。本稿では **Radloff 1** と表記する。

#### 2. Radloff XLI-2/-3:

-2 が漢文面、-3 がモンゴル文面で表裏となる [Radloff 1892, Оглавление 第 3 頁参照]。碑石は所在不明。本稿では漢文面を **Radloff 2**、モンゴル文面を **Radloff 3** とする。

#### 3. Poppe 1:

モンゴル文面。モンゴル科学アカデミー考古研究所所蔵。現存するのは下 3 分の 1 のみ。本稿では現存する部分を **Poppe 1 (lower) recto** と表記する。ポッペはこの碑片の裏に漢字があると認めながらも、あまりに断片にすぎため、その内容に言及するのは困難だとした [Поппе 1229, p. 22] が、2006 年に日本・モンゴル共同ビチェース・プロジェクトによって採拓したところ、漢字 35 文字が認められた。See 松川 2008b, pl. IV. 漢文面は **Poppe 1 (lower) verso** と表記する。

#### 4. Poppe 2:

モンゴル文面。所在不明。ポッペは裏に漢字があると記述している [Поппе 1229, p. 22]。

#### 5. 2003 recto/verso:

ドイツ・モンゴル共同「カラコルム宮殿」調査隊がエルデニゾー寺院内のツォグチン＝ドガンから発掘したもの。モンゴル科学アカデミー考古研究所所蔵。モンゴル文面と漢文面の表裏。モンゴル文面を **2003 verso**、漢文面を **2003 recto** と表記する。両面の拓影が Katalog p. 151 に掲載され、松川 2008b, pl. VII に転載。また、モンゴル文面の拓影は Munhtulga 2005, p. 173、漢文面の拓影は Мөнхбаяр 2005, p. 166、さらに碑石全体の写真が Баяр 2005, p. 157; Munkhtulga 2005, p. 172 にある。

#### 6. Shiraishi:

モンゴル科学アカデミー考古研究所所蔵。1984 年に発現していた。漢文面のみ。14 文字が認められる。拓影は白石・ツェヴェーンドルジ 2007, p. 4.

- 7) 原文は稀覯に属するので、以下、長文になるが邦訳とともに掲載する。なお、



クリーヴス論文にこの箇所の英語訳が存在する。See Cleaves 1952, pp. 10–11.

Это обстоятельство побудило меня в 1912 г., во время поездки в долину Орхона по поручению Русского Комитета для изучения Средней и Восточной Азии, еще раз внимательно осмотреть древние монгольские надписи и озаботиться изготовлением с них более отчетливых эстампажей.

Этот осмотр, прежде всего, привел к обнаружению 3 новых камней с надписью того же типа, что первый и второй из указанных выше камней (табл. XLI), но меньшего объема. Они находились в сложенном из камней основании двух субурганов в западной стене монастыря, именно первого и второго к югу от ворот этой стены.

Дальнейшее исследование привело меня к убеждению, что все 5 камней — остатки одной и той же гранитной плиты, которая, быть может, красовалась на спине большой черепахи, до сих пор стоящей возле монастыря (табл. XL). На одной стороне находилась монгольская надпись, а на другой — китайская.

Однако, даже найденные мною камни не дают возможности возстановить весь памятник, который был разбит на много частей; ряда частей обнаружить не удалось, несмотря на тщательные розыски. По всей вероятности, они покоятся или в фундаменте помоста для цама, или в основании каких-либо суврганов и при наружном осмотре не могли быть обнаружены. Возможно еще, что некоторые части вделаны в ворота, перила и т. п. внутрь монгольской стороны, а по видной китайской не были мною найдены. К сожалению, монахи отнеслись к выемке камней из сооружений крайне враждебно, несмотря на обещание привести все в прежний вид и сделать известное пожертвование на совершение обряда умилостивления тех духов, покой которых мог бы оказаться потревоженным. Даже найденные камни удалось эстампировать лишь с большим трудом, при чем пришлось отказаться от обследования оборотной китайской стороны.

В общем, все найденные камни позволяют возстановить, вероятно, только около половины памятника: камни В. В. Радлова — по видимому, большую часть нижней стороны, мои — части середины и верхнего правого угла монгольской надписи. Таким образом, ни начала, ни конца надписи не имеется; нет, следовательно, и точной даты постановки памятника. В самом тексте приведен ряд дат, обозначенных по 60-летию цикла, и упомянуты имена Чингис-хана, Угэдэй-хана и Мэнкэ-хана.

この状況は、私が1912年にロシアの中央・東アジア研究委員会の任務でオルホン溪谷に旅したときに、再び古代モンゴルの碑文を注意深く調査し、それらのより鮮明な拓本を作成するよう手配する気にさせた。

この調査の結果、何よりもまず、上述の碑石の最初と二つめ(図XLI)と同じ

タイプで、より小型の、銘文のある新たな碑石3つが発見された。それらは、寺院の西壁の2つのストゥーパ、すなわちこの壁の門から南へ最初と2番目のストゥーパの積み石の土台に位置していた。

その後の調査により、5つの碑石全てが同じ花崗岩石板の破片であり、それは、おそらく、寺院の近くに今日まで存在している巨大な亀(図XL)の背に誇らしげにそびえていたものであると確信するに至った。片面にはモンゴル語銘文、もう片面には漢文銘文があった。

しかしながら、私が発見した碑石さえ、多くの破片に壊された碑文の全体像を再構する可能性を与えていない；注意深く探索したにもかかわらず、一連の碑片を発見することはできなかった。しかしたぶん、それらは、あるいはツァム舞踊のための石畳の下か、あるいはどこかのストゥーパの根本に眠っており、外から見たところでは探し出すことができなかった。さらにありうることは、若干の碑片は門や欄干などにモンゴル文面を内側にして嵌め込まれており、見えている漢文面からは私には比定できなかったということである。残念ながら、全てをもとの状態に復帰し、それらの霊の休息が妨害されないよう慰撫の儀式を行うため若干の布施をすると約束したにもかかわらず、僧侶たちは石片を建物から取りはずすことに強い敵愾心を示した。見つかった碑石でさえ、大きな困難を伴って、やっと拓本を採ることができたが、反対側の漢文面の点検は断念することになった。

総じて、発見された全ての碑片は、おそらく、碑文のほぼ半分のみを再構することを可能にしている：V. V. ラドロフの碑石は、見たところ、モンゴル文面の下方の大部分、私のものは、中央部分と右上方部分である。かくして、碑文の冒頭も末尾も存在せず、従って、銘文の立石の正確な年代も現れない。同じテキストで、60年周期によるいくつかの年代が示され、チンギス＝ハン、オゴデイ＝ハン、モンケ＝ハンの名が言及されている。

- 8) ウネン紙：“МАЦҮКАВА ТАКАШИ: Эрдэнэзуу хийдийг хэзээ байгуулсныг тодруулах шинэ бичээс олдлоо.” *УНЭН* No. 179 (September 14), p. 8; ゴーニイ＝メデー紙：“ЭРДЭНЭ ЗУУ ХИЙДИЙН НУУЦААС...” *ЗУУНЫ МЭДЭЭ* No. 214 (September 14), p. 13.
- 9) 京都新聞、讀賣新聞、日経新聞（2009年10月17日朝刊）、毎日新聞（2009年10月22日朝刊）、朝日新聞（2009年12月10日夕刊）。
- 10) 『モンゴル秘史』は四部叢刊本『元朝秘史』に拠り、出現箇所は「卷：丁：行」で示す。栗林2009を参照した。
- 11) 『華夷訳語』（甲種本）は『涵芬樓秘笈』第4集所収の洪武刊本の影印に拠り、出現箇所は「卷：丁：行」で示す。栗林2003を参照した。
- 12) 2009年10月17日に大谷大学で開催されたエルデニゾー・プロジェクト2009年度第2回研究会における井上治・島根県立大学教授の報告に拠る。

(本学教授 東洋史学)

〈キーワード〉許有壬、石刻、カラコルム